

CONTENTS

- 1 ●令和7年度（2025年度）立正大学FD活動について
2～6 ●令和6年度（2024年度）ベスト・クラス賞 受賞科目紹介

- 7 ●令和6年度（2024年度）「授業アンケート」・「大学院学
修成果・満足度調査」実施概要

令和7年度（2025年度）立正大学FD活動について

立正大学長 北村 行伸

本年度のFD年間テーマは、教育研究の「質」の更なる高度化となっています。これまでは、「教育の質保証に向けた取り組みの実質化（令和1～4年度）」のように、質保証体制を定着させるための基礎な取り組みから、「多様な教育手法を活用した授業の展開（令和5～6年度）」のようにLMSの導入を見据えた取り組みなど、本学の実態を踏まえた基盤的な取り組みを行ってきました。令和7年度よりいよいよ、質の向上を目指す段階に入ったと言えます。

社会的にも、大学レベル、課程レベル、授業レベルという多層的な視点に基づく質保証のための取り組みが求められています。こうした取り組みのためには、特定の部署が何らかの制度を設けるだけでは不十分であり、教員各自の意識づけが欠かせないものとなっています。全学として、FDの活性化に向けた取り組みを実施していきたいと考えています。

今年度より、ラーニングマネジメントシステムとして、Open LMSを導入しました。これは学園の中期計画においても導入を目指していたものであり、従来行ってきた授業アンケートもこのシステム内で実施することができ、資料配布や課題提示、学生とのやり取りなどもスムーズに行うことができるシステムです。Open LMSを用いることで、より効率的で効果的な学習支援が実現されることが期待されています。

今年度よりアカデミックカレンダーの変更を行いました。これは単に授業期間の調整だけでなく、1コマ当たりの授業時間数をより長くとることによって、アクティブ・ラーニングなど、より多様で自由な授業方法を実施することを意図しています。今後、105分授業な



らではの授業スタイルをFDの形で共有していきたいと考えています。

全学的なFDの取り組みとしては、既に本年7月17日に教育開発センター主催により、外部アセスメント（GPS-Academic 1・3年生）についての報告会を行いました。これは毎年実施しているものですが、本学において蓄積されてきたデータ数も多くなり、年度間の比較や、3年生における1年生時のデータとの比較なども反映させたいと考えています。GPS-Academicは教育の成果の可視化のための方策一つとして位置づけられているものであり、単に結果を確認して終わるのではなく、今後この結果を踏まえた、教育の質向上のための具体的な取り組みを行い、そして再びその成果を確認していくという形で活用していくことを目指すものです。

既に学部長会議等を通して、全ての専任教員にFD研修会の参加の徹底をお願いしており、受講率100%を目指しているところですが、教育の質の高度化を目指して、皆様方の一層のご協力をお願いいたします。

令和6年度(2024年度) ベスト・クラス賞 受賞科目紹介 教員インタビュー

〈概要〉

2024年度授業アンケート結果より、ベスト・クラス賞を受賞した4名の先生に、授業設計のポイントや工夫をお伺いしました。



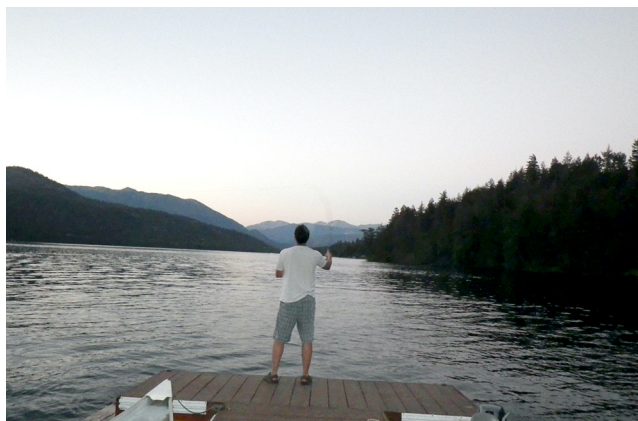
ローズ サミュエル 先生

(文学部語学教育課程准教授)

受賞科目名：「基礎英語2 (哲) C」(対面)

——授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

基礎英語2 (哲) Cは、英語を通じて学生が自信を深め、自分らしさを育むことを目標としたコミュニケーション主体の授業です。練習の時間では、特定テーマ



に基づく反復練習を行い、テスト時にはランダムなペアで全員の前で自然な英会話を実践してもらいます。2024年度の受講生は、思いやりと親しみやすさに溢れる学生ばかりでした。最終的に、「間違っても大丈夫」と安心して取り組める雰囲気を作り上げました。学期末には、英語での発表に対する緊張が和らぎ、大学や将来の人生に役立つ「やり抜く力」を身につけた学生がほとんどでした。

——授業構成のポイントや工夫したことについてお聞かせください。

「魚を1匹与えれば1日生きられるが、釣り方を教えれば一生生きられる」という中国の老子の格言は、私の基礎英語の授業のモットーです。私は学生が自ら考え、工夫しながら学べる環境を整えています。やや厳しい姿勢かもしれませんが、簡単には答えを教えず、努力し、失敗から学ぶプロセスを重視しています。何より学生を知的で尊敬すべき存在として接し、文学部の学生たちの優しさや責任感に自然と好感を抱きました。授業内容は実生活に基づくリアルな場面を扱うため、多くの学生にとって英語で自身の経験を語る初めての貴重な機会となりました。基礎英語は、教室で英語を話す初めての場であり、決して簡単な授業ではないかもしれませんが、学生の自己発見に繋がったと確信しています。英語力や「やり抜く力」を直接与えることはできませんが、それらを自ら習得する方法を指導すること、つまり「釣り方を教える」ことに徹しています。

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

どんな授業にも課題はありますが、「文学部の学生に英語の授業は本当に必要か？」という声が聞かれることもあります。確かに英語専攻の学生は少数ですが、私は立正大学の全学生に英語教育は不可欠だと考えま



す。多くの学生は自身の才能や知性に気づかぬまま入学してきます。大人への過渡期に英語に触れることで、新たな世界が広がるきっかけになることもあります。将来英語を使う機会が少なくても、授業で培った粘り

強さや思考力は、必ずどこかで活かされるはずです。

——ありがとうございました。

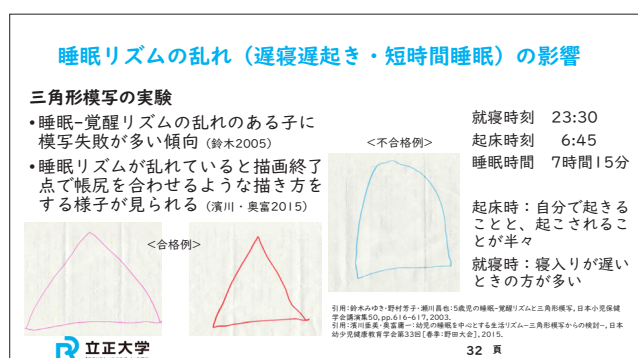
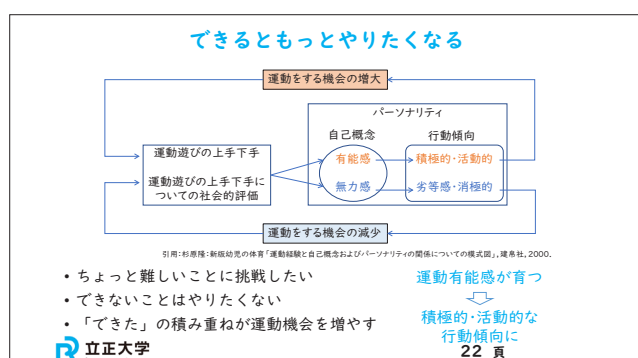
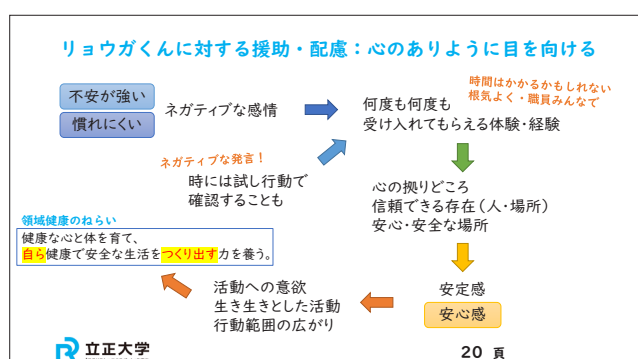


奥富 庸一 先生（社会福祉学部教授）

受賞科目名：「領域 [健康]」（対面）

——授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

領域 [健康] は、保育所保育指針等で定められた「領域健康」の内容を紹介する授業です。保育所保育指針では、3歳以上児向けに10の具体的な内容が示されており、授業ではこれらを一つずつ取り上げます。例えば、



「身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする」という内容では、保育のどの場面でこれを扱うのか、指示や強制ではなく、遊びや保育環境を通じて子どもたちが自発的に身につけることを支援する保育のあり方を学びます。保育所保育指針解説を読み解き、動画や写真を通じて保育の様子を確認しながら、具体的にイメージできる授業を展開しています。

——授業構成のポイントや工夫したことについてお聞かせください。

授業の流れは、前回の振り返りコメントの紹介、資料に基づく解説、動画視聴、振り返りコメントの記入で構成されます。グループワークや学生を指名しての意見発表など、学生同士や教員との双方向の交流は特に設けず、講義形式を採用しています。毎回、授業の最後に「今日の授業で印象に残ったことや疑問、質問をコメントペーパーに記載してください」と案内し、寄せられたコメントから3~4名分のものを匿名で紹介しています。授業ではパワーポイントのスライドを印刷資料として配布し、書き込み式の形式で提供します。学生はスクリーンを見ながら空欄を埋めていきますが、埋まっているフルスライドはLMSで公開しています。後方の席でスクリーンが見づらい場合は、スマートフォンやタブレットでの確認も認めています。座席は自由としています。また、授業では必ず関連動画を視聴します。

授業で留意しているのは、私自身の保育観や教育観を押し付けけないことです。保育の形は多様であり、学生はこれまでの経験や大学での学びを通じて独自の感性を育てています。授業改善アンケートで「先生の考えを押し付ける感じがしないところがいい」とのコメントをいただいた際は、ほっとしました。

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

現代では動画サイトや生成 AI を活用して簡単に知識を集められる一方、「なぜそうなるのか」を深く考える機会が減っていると感じます。調べた知識が実際の場面でのどのように現れ、活用されるかについては、体験知が重要です。講義形式の授業ではありますが、できる限り多くの体験を紹介し、学生がイメージしやすい内容を提供することを心がけています。

——ありがとうございました。



武井 徹也 先生（文学部）
受賞科目名：「哲学入門 B」（対面）

——授業の目的や概要、授業の流れについてお聞 かせください。

哲学入門 B は、古代ギリシアの哲学者タレスからソクラテスに至る思想をたどり、哲学の基礎を学ぶことを目的とした教養的科目の講義です。毎回、書き込み式の配布プリントとリアクションペーパーを活用して授業を進めています。

最初の授業では、哲学を学ぶには「子どもの感受性」と「大人の論理」の両方が大切であると学生に伝えます。「万学の女王」と称される哲学は、世界のあらゆる事象を合理的に理解しようとする人間精神の営みです。このような話をするのは、若い精神を持つ学生に、柔軟に多様な「ものの考え方」を学んでほしいとの思いからです。

——授業構成のポイントや工夫したことについて お聞かせください。

リアクションペーパーを積極的に活用しています。例えば、「私たち人間は自然の一部なのか」という哲学の大きな問いを取り上げます。この問題では、過去の哲学者の思想を解説するだけでなく、「花見という日本人の営み」「富士山とゴミ問題」や「古代ギリシアとキリスト教の自然観」、「地球環境と SDGs」といった、学生が関心を持ちやすい観点からも議論を展開し、私自身の見解も提示します。その後、リアクションペーパーで「この問題について、あなたはどのように考えますか？」と問いかけます。

カントを引き合いに出すまでもなく、哲学とはただ他者の思想を暗記したりパラフレーズしたりするものではありません。最初は「哲学」に身構える学生もありますが、考える材料が提供されれば、自ら進んで熱心に問題に取り組めます。そうして書かれたリアクションペーパーの回答は生き生きとしており、私はその回答にフィードバックを行いながら、この問題についての考え方を学生と共有し深めます。このような授業構成は多くの学生から好評を得ています。哲学入門 B において、私の役割は学生の生きた思考を支えることだと考えています。

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展 望についてお聞かせください。

この授業は大教室での講義形式ですが、私からの一

哲学入門 B 講義・第 2 回 「ミレトス学派——タレス」

○ミレトス学派——古代ギリシア東方の都市ミレトスで誕生した哲学の最古の学派。紀元前 500 年代に台頭。自然(ピュシス)の在り方について考えた。

◎タレス——紀元前 685 年頃に活躍した、古代ギリシア七賢人の一人。ミレトス学派の創始者であり、「哲学の祖」とされる。書物は残しておらず、彼の言葉は後の人によって伝承された。



- ものを合理的に考える、多彩な顔をもった賢人
 - ・疫病を防ぐために河川を工事し、川の氾濫を減らす。
 - ・ペルシアの脅威に対して、ギリシア諸都市の政治的連合を提唱する。
 - ・オリブを榨る道具の使用権を独占し、大金を得る。
- 自然の様々なことがらを合理的に考える、学識のある賢人
 - ・天体の運動……紀元前 585 年 5 月 28 日の日食を予言
 -
 - ・物体の測定……エジプトのピラミッドの高さを測る方法を発見
 -

※

1

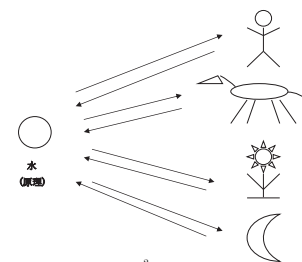
1. 「万物の原理(アルケー)は水である」(DK, 11A12 —アリストテレス『形而上学』から)

○私たちが目にしている様々な個々のもの(人間、動植物、無機物など)は、常に生まれ
たり滅んだり変化したりしている。これらは反復して循環している。では、これらは
どこからやってきて、どこへ去ってゆくのか？

↓
自然(この世界のあらゆるものは、営動的に成る一つのものから生じて(=生まれて)、
またそれへと還ってゆく(=滅んでゆく)のではないのか？
↓

→

→



2

方的な講義にならないよう留意しています。毎回のリアクションペーパーは、「教員の話を書く＋自分の考えを述べる」という双方向性を学生に実感してもらうためのものです。また、授業への意見や質問も受け付け、必ずフィードバックを行うことで、私と学生との心理的な距離を縮めることを意識しています。

ただし、学生からは私や他の学生とディスカッションしたいとの要望も少なくありません。大人数の講義形式でこうした機会をどう実現するかは、今後の課題と考えています。

——ありがとうございました。



伊藤 康嗣 先生（教職課程非常勤講師）

受賞科目名：「生徒理解と教育相談 A /
生活指導の研究 I A」（対面）

——授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この授業では、生徒理解と教育相談に関する理論を学ぶだけでなく、体験を通じてその楽しさや有効性を実感し、次世代の生徒に伝えられるよう設計しています。

まず、学校教育に関する法令や教育相談の基礎理論や技法を学びます。これを基に傾聴スキル、構成的グループエンカウンター（SGE）、ソーシャルスキルトレーニング（SST）などのグループワークを実施し、交流しやすい環境を整えます。

話し合いでは、安心して本音を語れるよう一定のルールを設けます。授業が進むにつれ学生の自己開示が進み、不登校やいじめ被害といったデリケートな経験も開示されるようになります。これにより、フラットな関係性のもと自由度の高い発言が生まれ、多角的な思考が深まり、より深い学びが得られます。自己表現が苦手な学生も徐々に自分らしい意見を述べられるようになります。

——授業構成のポイントや工夫したことについてお聞かせください。

授業のポイントは、仲間外れにされることなく安心して語り合える「心理的安全性の確保」です。そのために、「他者の言葉を肯定的に聴く」「人を傷つける発言をしない」「疑問が生じた際は礼儀正しく質問する」などのルールを徹底します。



体験 構成的グループエンカウンター リレーションづくり

- リチュアル・グルーピング
- バースデイライン
- 質問ジャンケン
- 他者紹介
- ネームゲーム
- 合わせアドジャン
- アドジャントーク
- 担任Yes Noクイズ



グループ分けはトランプを用いてランダムに行い、さまざまな学部が交流できるようにします。これにより、多様な意見や考え方に触れる機会を提供します。話し合いでは、最初は受容的な姿勢を重視しますが、徐々に改善に向けたアドバイスやクリティカルシンキングなどの技法を取り入れ、議論の質を高めています。

リアクションペーパーは授業後すぐに提出させ、次回に全体フィードバックと個別評価を提供します。これにより課題を明確化し、高いレベルの学びにつながっています。

学生のコメントとしては、「実際に体験しながら学べることが多いので、より分かりやすく感じる」「他学部・他学科の学生と話し合いができるので、コミュニケーション力が身に付く、また様々な意見を聞いて、自分の考えに取り入れることができた」「先生が率先して心地よい雰囲気を作ってくれるおかげで、学生同士も話しやすい」「周りの意見を大切にすることを重視しているため、暗い雰囲気になる授業がなかった」「毎回のリアクションペーパーに対するフィードバックが充実している」などがありました。

——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

学生からは授業の進行速度が速いとの指摘がありました。話し合いはこの授業の核になる部分であるため、反転学習ができるよう事前課題や主体的な学びを充実



させることで、より質の高い話し合いを実現する必要があります。

最終的に、生徒理解の方法や教育相談の理論や技法を体験的に学び、集団生活における交流の楽しさや重要性を実感してくれたものと考えています。この経験を基に、学生が新たな技法を創出し、次代の子どもた

ちに伝えてくれることを期待しています。立正大学で学んだ学生が将来、各地の学校で楽しく充実した教育環境を築いてくれることを願っています。

——ありがとうございました。

令和6年度(2024年度) 「授業アンケート」・「大学院学修成果・満足度調査」実施概要

授業アンケート

立正大学では、令和6年度の自己点検活動として、ディプロマ・ポリシー（以下、DP）、コア・ポリシー（以下、CP）、アセスメントポリシーの見直しを行いました。その過程で、2000年度から実施してきた「授業改善アンケート」の質問項目を見直し、科目レベルだけでなく教育課程レベルにおける学修成果のアセスメント指標として活用できるよう、質問項目を設定しました。さらに、実施の目的や結果の活用方法を拡大したことから、呼称を「授業アンケート」変更し実施を開始しました。

教員の皆さんには、多様な授業実施手法の共有および授業内容や方法の点検・改善への活用、学生の皆さんには、授業の理解度や達成度の自己評価の確認に活用いただくことを期待しています。

〈実施期間〉

- 第1期 2024年7月1日～7月13日
- 第2期 2024年12月2日～12月14日

〈対象科目〉

第1期は第1期科目、第2期は第2期科目および通年科目の全科目。ただし、受講者5人未満、ゼミ、卒論、学修の基礎、オムニバス科目、集中科目については、学部ごとにアンケート実施の可否を決定。

〈実施方法〉

実施期間の該当科目授業時間中に原則的に実施。スマートフォン等から Web システム「C-learning」より回答。

教育改善のための学生による授業アンケート



大学院学修成果・満足度調査

立正大学大学院修士課程および大学院博士後期課程においては、2009年度から実施してきた「大学院生の教育・研究環境に関するアンケート」を廃止し、新たに「大学院学修成果・満足度調査」を設計し、大学院修士課程および博士後期課程で定める DP に対応する評価指標として活用できるよう実施することとしました。大学院生には、自己評価や満足度の確認に活用いただくことを期待しています。

また、「大学院学修成果・満足度調査」には自由記述による質問項目を設けています。この自由記述から得られる学生の声を、教育・研究環境の改善に活用していきます。

〈実施期間〉

2024年12月下旬～2025年4月末日まで

〈対象学生〉

修士課程および博士後期課程に在籍する大学院生

〈回答方法〉

Microsoft Forms より回答。

編集後記

第33号では、令和6年度のベストクラス賞受賞の4名の先生へのインタビュー、そして、令和6年度の授業アンケートの実施概要を中心に掲載しました。受賞された先生方、ご協力誠にありがとうございます。他学部の先生方の講義について知る機会は多くない状況にあると思います。本ニュースレターを通じて、ベストクラス賞を受賞された先生方のさまざまな工夫をご覧いただき、皆様の講義

に活かして、学生たちの成長につなげていただければ幸いです。2024年度の組織改編により、教育開発センターに発行が移管されて2年目となります。今後も、意義ある情報発信をしていきたいと、担当部会として考えております。

（教育開発センター FD 部会長 経済学部 准教授
慶田 昌之）